

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'77 夏

連絡先

東京都渋谷区代々木二一二二
婦人会館内 〒151

発行 一九七七年六月八日

四月二三日の総会で、次のアピール文が採択されました

家庭科の男女共修をすすめましょう

家庭生活は、男女の協力によって営まれるものです。

それなのに、今、家庭科は女子のための教科のように扱われ、「男は仕事、女は家庭」といふ古い考え方が助長され、男は生活的に自立しにくいように、女は経済的に自立しにくいように育てられています。

この状態を改めるため、家庭科の男女共修をすすめる会が運動を始めて三年余り、共修の意義は一般にかなり理解されるようになりました。

更に、国際婦人年や低成長時代の訪れによって、家庭責任は男女双方にあること、男も女も生活をたいてせつにしなければならないことが広く認められて来ました。

他にもかわらず、昨年の教育課程審議会の答申では、中学の「技術・家庭」は性によって別の学習領域が指定され、高校の「家庭一般」の女子のみ必修は現行通りとなり、家庭科は当分女子教科として続くことがまわってしまつたのです。

歴史の流れに逆行するこのような決定は断じて許せません。

この決定を一日も早くくつがえし、すべての中学・高校で家庭科の男女共修が実現されるよう、少々の立場の違いや考え方の違いを超えて、大きく力を集めて行きましよう。

一九七七年四月二十三日

家庭科の男女共修をすすめる会

もくじ

家庭科の男女共修をすすめましよう

77年度総会報告

世話人紹介

世話人会報告

宮崎の主婦たちも共修に賛成

新潟から

女たちが期待できる政党は

あちこちで共修支持の声

運動記録が本になります

おねがい

(8) (8) (8) (7) (7) (6) (6) (5) (2) (1)

集会のお知らせ

テーマ これからの家庭科
～新指導要領(小・中)を中心に～

と き 7月2日(土) 午後1:30-4:30

ところ 婦人会館

報告者 和田典子 佐藤慶子

77年度総会報告

四月二三日(土)

PM一時三〇分～四時三〇分

於・婦選会館

初の総会開かれる

家庭科の男女共修をすすめる会は、四月から新しい組織をしてスタート、その初の総会が四月二三日に開かれました。

まず、運動と運動をとりまく状況について半田たつ子さんから報告がありました。

よく晴れたおだやかな土曜日、春闘も山場を過ぎて足の心配もなく、まずまず恵まれた総会日和。といっても、学習会等に較べて、総会は出席者が少いのが常。いつもよりせまい部屋を予約して、それでもあんまりガラガラだったらどうしよう、定刻になっても世話を焼くということになりはしないかと、準備のメンバーはひやひやしていました。ところが、どうやら満席となり、期待通りのスタートを切ることができました。(目標が低過ぎるとお叱りを受けるかもしれません)

続いて出席者全員が自己紹介をしました。お年寄(失礼!)が並ぶ結果となり、「若い方の出席が多いことは運動の将来が明るいということだ」という発言がある一方、「若い人ばかりの運動はばかにされがちだが、この会は賛録のある方が多くて頼もしい」という

声も出ていました。

報告

はだめだと思った」「家庭の中でみんなに家事に協力させたい」など、現状の告発や運動に参加するようになった動機が次々に語られました。また、遠く姫路から香川敦子さんが、新潟から小野塚サチ子さんが出席してくださったことが印象的でした。(新潟の状況については、7ページに掲載します)

「運動をすすめる中で、変えようと思えば世の中は変わるものだということがわかった」と何人も発言すると、「世の中はちっとも変わっていないというのが実感だ」という声もきかれました。

何とか変えるようにとにかく運動を続けて行こうというのが、出席者に共通した気持ちであったことは確かでしょう。

自己紹介

「性差別に不満」「男の子が家庭科が習えないことに不満を持っている」「男の子はあまりに生活的にスポイルされている」「戦前のような女がつくられるという危機感を持っている」「教科書会社の内情を見て、これで

議事

①「三、会員」の「他の資格は必要としませんでした。この次に「たゞし、個人加盟を原則とし、内容については他のいろいろな団体で研究している。この会で内容についてまで責任を持つのはむりではないか」

た方がよいのではないか」

「内容については他のいろいろな団体で研究している。この会で内容についてまで責任を持つのはむりではないか」

②最後に次の項を加える。

「『運動の内容』のところで、教科内容の研究や情報交換に触れている。目的は制度に限ってよいのではないか」

予算

「学生に対しては会費を割引するということとは考えないのか」という質問がありました。結局運動を維持して行くためには二千元がギリギリだということで、予算案は承認されました。但し、必要に応じて会報だけ売ることも考慮することにしました。(6頁世話人報告参照)

最後に

「ことばを変えようと別の運動かと思われる」「共通必修の略と考えてよいのではないか」

また、「教育制度全体を考え直さない限り

共修の実現もむずかしいのだから、教育制度

を変え、これを目標に入れては」という提案に対しては次のような意見が出ました。

「共修をすすめることが教育制度を変えて行く力になる」

「この会のよいところは、目標をせまく限っているところ。あまり目標を拡げると、結局何もできなくなってしまう。会員がふえて分科会がつくれる位になれば」といろいろな目標をかげてもよいが」

結局、「運動のすすめ方について」に関し対し、次のような反論があつて、これまで通しては、次の点だけ修正することを決めました。り「共修」ということばを使うことにしまし

(梶谷)

高校長協会に再度交渉

塚本 しう子

四月二二日午後佐田灘全国高校長協会家庭部会副理事長・都立白鷗高校校長に電話で再度家庭科の男女共修をすすめる会へ講師としての出席を要請した。「日は先になつて結構であるから御指定いただきたい」と申し上げたが、「不特定多数の前での話し合いには応じられない」ということであつた。「決議の削除の最後に男女共修について研究する」という項目があつたので是非私共の意見も聞いていただきたい」というと「研究はするが、それは簡単にいくものではない」但し「教育について堅実に考える人々と静かに五十六名となら話し合うという姿勢があれば考えてもいい。そこではホンネもタマエも出し合いながら、あとでその話し合いを決議に入れるなどということなくメンツにこだわらずにやりたい。私共の考え方と家庭科の男女共修をすすめる会の考え方とそんなに違ひはないのではないですか」と話された。最後に私の名前を再度確認され、「静かに、落ち着いた雰囲気の中で、五十六名となり面会してもよい」ということで「是非またお願いに上るからよろしくお願いします。」と頼み電話を切つた。

参議院で

半田 たつ子

三月十六日、参議院決算委員会、市川房枝氏が、教育における男女差別について質問しました。「①公立高校に男女別学校が存在する問題、②教科書の記述やさし絵が、男女の固定的役割分担を子供たちに植えつけている問題、③技術・家庭科の男女二系列、家庭一般女子必修など、教科による差別の問題、更に、家庭科は男女共学の教科として誕生し、女子用教科に変わった経過」を問われ、

社会に、が世界的なテーマとなつてゐることから「従来の役割分担意識にとらわれない教育・訓練の推進」がうたはれてゐるのに、教課書の答申はまっこうから反する。一休文部省は指導要領をどう書くつもりか、と追求しました。文相は「目ざすべき方向は推進会議の意見の通り」と肯定したものの、初中局長は「色々の意見を聞いた上で教課審が決定したのだから、答申こそ指導要領の指針」と言い切り、まさに教課審を楯にその陰に隠れる官僚のずるさ丸出しでした。

第二八回全国家庭科教育協会総会

研究大会 — 佐田灘氏語る —

馬場 洋子

海部文相は「教育における男女の機会均等」は憲法の精神でもあり、当然守られなければならないし、現実には守られてゐる」とタマエを答え、諸沢初中局長は「①男女共学校の数を挙げ、国公立では共学がふえてゐる。②「男は外・女は内」は社会通念であるから特に女性を蔑視したものでない限りチェックしない ③家庭科の変遷はすべて教課審の答申によるもの」と木で鼻をくくつたような答えてした。

市川氏は、国際婦人年世界会議、企画推進会議意見等を具体的にあげ、男女の役割意識の再検討と、男はもっと家庭に、女はもっと

三月二七日・二九日、第二八回全国家庭科教育協会総会、研 大会を東京・杉野女子大学で開催。28日のシンポジウムは、「家庭科教育の課題」をテーマに、講師・佐田灘（都立白鷗高校長）、外山滋比古（お茶の水女子大学教授）、藤枝真子（横浜国立大 助教授）、道喜美代（日本女子大学長）、司会・玉井美知子（神奈川指導主事、元教課審委員）の諸氏が出席。

四氏共に、「社会変化にいかに対応するかが課題」。で一致しながら、今の社会の動

近畿

遠山久美子 東大阪市岩田町六一二四〇

性別役割の固定化は、人生を無味乾燥なものにする。性別役割に新しい性格をプラスさせることを生き方の基軸にして研究と仕事にはげみたい。

香川敦子 姫路市新在家四一五一七

世の中「わかっちゃいない」現象が山ほどありますが、これはその一級品と考えますので、少しでも推進のお役にたたいと考へます。

中国

西村力子 米子市博労町四一六七一三

野村一枝 広島県賀茂郡大和町和木

九州

薄タカ子 福岡県宗像福岡町二五五六一

共稼ぎや妻の病気の時には、夫が一手に育児をひきうける世代になつてきた。学校より、現実社会の方が進んでゐる。共修は当然のこと。

渡辺道子 大分県竹田市上角七六九

立山ちづ子 熊本県阿蘇郡小国町宮原一九一九

自由な言動は、心身ともに独立した状態にあるときのみ保障される。独立は毎日の生の営みが自力で行われることによつて築かれる。

き、は何か？ 道氏の「生活技能だけでない、家庭生活の意義や社会科学に基づいて教える男女共にやる家庭科が必要」という発言だけで、明確な提言はなかつた。又、校長協会家庭部会決議が二月に骨抜き修正されているが、佐田氏の発言に何ら変化はない——家庭はこれからも大切なもの。社会での疎外を回復させる。家庭で生活の文化は創造されていく。創造性を高めるために、女性として目覚めてくる高校生に家庭科は必要。高校の家庭科はさらに改革され、母性が強調されなければならぬ。（男性は？）身の回り程度は中学段階でできる。又、倫社など他教科でもできる。など。午後は文部省審議官奥田真丈氏が「世界教育の動向」を講演した。

世話人紹介

前号に掲載の二三名の方と、その後総会当日までに意志表示された五名の方が世話人として総会で承認されました。

北海道

斎藤節子 帯広市東二条南四丁目一九

こどもの学習権・国民の教育権を保障し、

以上の方々には、それぞれの地域の連絡の中心になっていただきます。東京周辺の連絡の中心は婦連会館の事務局といたします。

東京周辺

青山和世

人として生きる基本的な力を、教育の場で男女がともに修得するために、中学校・高等学校での家庭科の男女共修を実現することです。

水野京子

生活に関する正しい教育は、誰もが受けるべきです。男女間の偏見、差別意識の解消のためにも、家庭科の共修は絶対に必要です。

八島紀子

生活を創り出すのは男と女。その生活を考える家庭科こそ、男女共修が当然である。

青木千枝子

市川房枝

大熊信行

梶谷典子

栗原京子

駒野陽子

佐藤慶子

嶋田道子

中嶋里美

馬場洋子

半田たつ子

樋口恵子

和田典子

以上二八名

更に総会後、福井の八百山和子さんから意志表示がありました。

五月一四日

世話人会報告

新指導要領案が連休明けに発表されるといふ情報を得て、なるべく早くその内容を検討し、対応策を考えようと、この日に世話人会を開いたのですが、発表は日延べになってしまったので、次のようなことを決めました。

- 1 次の集会について
- 2 会報について
- 3 出版について
- 4 ページに掲載のように決定

夏月号は六月八日発送。原則として会員だけに送るが、機関誌交換などの申し入れがあった場合は検討する。文部省、自治体関係、報道関係などぜひ必要だと思われるところには贈呈する。会報がほしい方には会員になっていただくのが原則だが、運動を拡げるために必要な場合は、77春、77夏の号は一部一〇〇円で売る。

(梶谷)

なお、発起人としてずっと事務局の中心的存在だった塚本しう子さんは、夫君の転勤のためブラジルに赴かれることになりました。

宮崎の主婦たちも共修に賛成

九州の宮崎というところ、男女平等という面では極めて保守的というイメージをお持ちの方が多くではないでしょうか。けれども、そうきめつけることはやめたいと思います。宮崎でも、二十代から四十代までの団地や農家の主婦について意識調査をしたところ、「中学生以上の男子にも家庭科が必要」というのは四五%、「思わない」が二五%、「どちらでも」が三〇%。「必要」という意見は過半数ではないけれど最多数を占めています。夫の家事手伝いは、「ある程度」を入れると半数以上、男の子にも九割近くが家事をさせていると答えています。調査をしたのは「宮崎草の実会」で昨年暮のこと。

朝日新聞宮崎版から引用しました。

(梶谷)

新潟から

小野塚サチ子

新潟の共修の動きを報告します。四年位前から教研などで「男女共修を実現させるために、具体的実践を深めよう」ということで遅々たる歩みがありました。又、婦人部などでもこの問題は討論されてきました。そのうちの中から、昨年、「家庭科の男女共修専門委員会」が発足しました。そこでは、教科内容を中心に検討されることになっています。全県的にも、いくつかの学校で、職員会議で「共修」を決定しています。(条件が整わなくて実施していない学校もある。)男性教員の関心も増えてきました。しかし昨年あたりから別の問題も出てきました。家庭系の職業科が転科されるケースがありました。それに対し、家庭科の教師の側から、「共修は、廃止に通じている。共修を主張したことで、我々の生活権すら争れる。」という空気も出てきました。共修という火は少し小さくなっています。しかし、すすめる会と共に輪を広げていくしかないでしょう。

女たちが期待できる政党は？

— 国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会例会から —

駒野 陽子

共産党 — 家庭生活の基礎技術は男女ともに教える。基本的に男女は共学。

日本女性党 — 家庭科は女子は選択、男子は必修とする。男女は共学で学ぶこと。

4月16日(土)、標記のテーマでもたれた集会には、社会党、共産党、公明党、民社党、吉武輝子とともに新しい運動を求める人びとの会、日本女性党から、それぞれの議員または、党代表者が出席して、女性に関する政策を展開して、その中で「家庭科について」「男女共学について」回答を拾ってみた。(以下発言順)

公明党 — 中学校の技術・家庭は一元化し高校も含めて家庭科は男女共修の方向にする。

社会党 — 個人的には将来は家庭科はなくしていくべきだと思う。幼児期から両親が教育するのが望ましいと思うから……。

民社党 — 今の家庭科の内容は技術的に傾きすぎている。家庭生活の基本を教える生活科として、共修にする。公立高校は共学。一部地域で父母の要求が強ければ、実情に応じて別学も可。

自由民主党 — 技術のみの家庭科ではなく、社会の中で生活の中で男女の生きる理念を学ぶ学科にしたい。小・中・高一貫して共修。高校の共学は当然。

自由民主党 — 家庭生活の基礎技術は男女ともに教える。基本的に男女は共学。

日本女性党 — 家庭科は女子は選択、男子は必修とする。男女は共学で学ぶこと。

なお、自民党と新自由クラブは他党と同じように案内と質問状を送り出席を要請したが、出席もなく、質問状への回答もいただけなかつたのが残念。与野党の家庭科に対する考え方を比較するよいチャンスだったのに——

あちこちで共修支持の声

樋口 恵子

△四月二日▽家政学会原論研究会委員会議東フロックから「外から見えた家政学」を語る上、

男女共修と家政学の役割を述べ、来たのですけれど。実は、家庭科女子必修の理論的中枢(?)と伝えきく大先生もいらつゝったの

ですが、その場では積極的な反論は全くなく、共修支持のムードでした。家政学会でも男女共修を積極的にすすめてくださるようお願いして来ました。

△四月二日▽高知県婦人週間行事の席上、中学の先輩の家庭科教師から、たった一人の共修実践例を含め、女子教育に関する熱心な発言がありました。

△五月一六日▽土浦市の友人から電話。茨城県でも、先日婦人週間行事の集会有り、彼女が家庭分科会の司会役をつとめました。席上、主婦が病気をした時の切実な体験などから「家庭科の男女共修を」という声が盛り上がり、教育委員会に申し入れようという決議がすんなり通ってしまいました。ところで、

恒例の婦人会議は、県の婦人少年室が主催する行事で、「決断はしない話し合いの場」が建前。お役所としては大困りのようですが、出席者たちはそれならわれわれで共修ミニグランプをつくらうと相談中とのことです。東京と連絡をとりなさいという電話でした。

共修をすすめる会の運動記録が本になります

家庭科の男女共修をすすめる会では、三年間の活動記録を本にまとめることにしました。体裁はB6判二〇〇ページ、定価千円前後、発行予定は十一月末で名称は「家庭科、なぜ女だけ——家庭科の男女共修をすすめる会の活動記録」(仮称)。内容は、会が成立した昭和四八年の「家庭科女子四単位必修完全実施」にまつわる家庭科教育の状況、会が結成されて次々女子特性論の矛盾が解明されてゆく様子、行政への働きかけや国際婦人年の中での運動の飛躍的発展、そして教課書の動きや、校長会の共修要求への反響、その中で着実に発展していく中学校・高校での共修実践例など。

(佐藤)

おねがい

○さゝやかな、あまりにもさゝやかな会報を再びお送りいたします。
次の号には、新指等要領も掲載する予定で、このあと少しづつ内容を豊かにして行きたいと願っていますので、どうぞお許しください。
○7月2日の集会、ぜひおさそい合わせの上ご出席ください。会員でない方も大歓迎です。
○婦人問題関係、教育関係の集会有るときにパンフレットや資料、会報などをどんどん販売してください。それが運動を拡げることになります。会報は、「世話人会報告」にありますように、77春、77夏の号は一部一〇〇円です。
○家庭科教育三月号に掲載された「家庭科の男女共修をすすめる会」の活動の記録のぬきずりができていますので、お入用の方は郵便でお申し込みください。一部八〇円、送料は五〇円です。
○会費をまだおさめになっていない方、なるべく早くお願いいたします。前にもおしらせしましたように、できるだけ郵便振替で、「77年度会費」と書いてお送り下さい。番号は東京一九一八九一です。